
イッシュ地方ぶらり珍道中

独活

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イッシュ地方ぶらり珍道中

【Zマーク】

Z36520

【作者名】

独活

【あらすじ】

ホワイトとかチエレンとかベルとかアララギ博士とかが喋りながら進むだけのお話です。ネタバレしかないです

とにかくやる気がない文章なので、やる気のない文章が嫌いな方は向かいです

「」での『やる気がない』とは『グダグダ』とか、そういう解釈を

じてべだれこ

それを分かつた上でお読み下せこ

鹽をさだめぬ飯のなごりと鹽を廻らむかたの拂こじて

episode 1 - 1 それじゃあベルにはポカブをあげよう。

ゲーム開始 → アラカリ博士に図鑑をもらい今まで

ホワイト「こらんにちは。主人公のホワイトです。
早速ですが、ポケモンBWやります。」

ホワイト「… とりあえず、ホワイト購入しました。

ダイパで493まで行つた時、

『これでひとまずポケモンとしては完成だらうな。
ポケモンスタジアム的なものは出るだらうけど新ポケはもうないだ
ろ』

とずっと思つてたので、ホワイト発売の知らせにびっくりしました。

なんだ、まだ増えるのか！泣き声とかポケモンの種類とか大丈夫か？
と色々不安でしたが

超人気になつたので、自分も買ってみたわけです。

とりあえず、これから起動してみます。

ちなみに、自分はいつもゲーム買うと説明書読む癖がありますが、
本作に限つて説明書には一切目を通しません。

出会いは新鮮な方がいいもの。

それでは… 起動！ちなみにDSiです。』

ホワイト「おお…ポケモンカンパニー…
ゲームフリークの口ゴも凄い凝ってる…

ん?何だこの王の間みたいなのは…
王に何か渡してる? FEっぽい構図だな…

とか色々思いながら、とりあえずタイトルです。
今作はタイトルのBGMが派手で迫力ありますね。
ダイパプラチナは不気味でしたけど。

とりあえずAを押すと、タイトルでぐるぐる回ってたポケモンが鳴きました。

どうでもいいけどこのポケモン、全部黒いのに一箇所だけ青いのね。
この事が何かゲーム中で重要な意味を…成さないか。
それじゃあはじめます。最初から。性別は男性です」

「じゃんにちは!ポケットモンスターの世界へよつこやー!」

ホワイト「…!? ジ…じじいじゃないだと…!?
ポケモン博士がじじいじゃないだと…?
いや確かに、ウツギとかオダマキとか若かつたけど…」

「私の名前はアララギ。」

ホワイト「何と…女性博士…これは初めてだな…

僕は熟女あんま好きじゃないけど」彼は期待出来る……。「

アララギ「何ぶつぶつ言つてんの?まあいいわ、名前教えて?」

ホワイト「僕はホワイトです。ホワイトです。ホワイトです」

アララギ「分かった、ホワイトね。二回も言わないでいいわよ。で……ちちはあなたのお友達よ」

ホワイト「ん?一人もいるのか…」

「…」、これが今作のライバルの女の子か…！
アララギ先生…」の子の名前何ですか！」

アララギ「うちはチエレン。眞面目で頼れる男の子よ」

ホワイト「先生!無視しないで…」うかの子の名前教えて下せ…」

アララギ「はいはい。うちはベル。ちょっとおつとつした子」

ホワイト「ベル!ベルですね!ベル!」

アララギ「興奮しそうよー。ちょっと落ち着きなさい」

ホワイト「はい…」

アララギ「ちゃんと男の方の名前も覚えてやつてねー」

ホワイト「はい…確かに…チエで始まつた…

そうだ！ チョリムだー！」

アララギ「チョレンよー。何でシンオウのポケモンの名前になつてんのよー」

ホワイト「そんな奴の名前なんてどうでもいいですー早く始めたいです！」

アララギ「はいはい、分かりました。
それじゃあ、ひとつと始めますか。

ポケットモンスターの世界へ、レッツ、ゴーー！」

ホワイト「……僕の、部屋でしあうか」

「ホワイトー」

ホワイト「ん？ 何だ、さつきのメガネっ子だ」

チエレン「何だよメガネっ子って。僕は男だぞ」

ホワイト「じゃあメガネ田君でこによね。眼鏡田君」

チヨレン「変なあだ名つけるなーー！」

ホワイト「えー… 分かったよ。わせんと以前で呼ぶよ。チヨンボ」

チヨレン「チヨンボじゃなーー！チヨレンだーー！」

ホワイト「あ、わしだつけ」

チヨレン「全べ。今日せ、アリラギ博士からポケモンをもらひて聞いて
わざわざ君の家まで来たの」

ホワイト「え、わつの？」

チヨレン「そつなのつて…・・・せひ、田の前にプレゼントがあるだ
る」

ホワイト「あ、ホントだーま、まさかこの中に最初の三匹がーー！」

チヨレン「わづだよ…お前…」

ホワイト「えー、だつてゲーム始めたばかりなんだもん」

チヨレン「何訳のわからない事を…それより、ベルの奴遅いな

ホワイト「ベル…ベル来るのー・・・わざにベル来んのー？」

チョレン「何だよ、つるさーいな…来るよ。

ベル、いつもマイペースだけど、こんな大事な日今までマイペースか…」

ホワイト「家に来る…ハルカとはまた違うパターンだ。これも良い」

チョレン「あ、やつと来た」

ベル「あのう…『めんね、また遅くなつちやつた』

ホワイト「『んにちは！』ベル！」

ベル「こんにちは？何、いきなり改まつちやつて」

チョレン「ベル、遅いよ…

君がマイペースなのは10年も前から知つてゐけどさ。今日はポケモンをもらひえる日だつてのに」

ホワイト「10年も前から…？」

チョレン「…だつて僕ら幼馴染じやないか」

ホワイト「…貴様…抜け駆けを…！」

チョレン「な、何だよ、意味分からぬ」

ホワイト「…あ、三人つて事は…この三人でポケモンを共有するのか！」

ベル「そうだよ。わあ、ホワイト、とりあえず開けてみよつよー…」

チヨレン「それもそうだな。ホワイト、君から選ぶんだ」

ホワイト「まあね。僕主人公だしね」

ベル「どんなポケモンがいるのかなー！わくわく！」

ホワイト（やばい、予想以上に今作のベル可愛いぞ…）

チヨレン「ほら、早く開けなよ」

ホワイト「あ、はいはい。

…どれにするか…
ポカブ、ミジュマル、ツタージャか…

チヨレン「んー。僕だったりミジュマルがいいかな」

ホワイト「お前は黙つてろ！僕が選ぶんだ…！」

チヨレン「はい、はい」

ベル「わー！このポカブって子可愛いねー！」

ホワイト「それじゃあベルにはポカブをあげよう！」

チヨレン「何この待遇の差」

ベル「へ？で、でもここの？」

ホワイト「いいのいいの！」

僕はミジュマルが欲しかったしね！」

ベル「ありがとー！じゃあ私も力づにするー！」

チエレン「…ま、僕は、最初からツタージャが欲しかったけど

ベル「それじゃあ早速！」

ホワイト「え？」

ベル「勝負しようつよ！ポケモン勝負ー！」

ホワイト「嘘？いきなり？初代のライバルもいきなりだつたけど

ベル「まず勝負してみよーねー！」

チエレン「…ベル、ここは家の中だよ？」

ベル「大丈夫だよ！」

チエレン「…まあ、そうだな。僕も勝負がしたいな。
それじゃ、ホワイト、ちょっと勝負してくれるかい？」

ホワイト「誰がお前なんかと勝負するか！！」

それにはせたいあたりしか覚えてないだろーつまらん！」

ベル「そつかー。私も勝負したかつたんだけどなー」

ホワイト「ベルさん僕と勝負しましょう……。」

チエレン「何この扱いの差」

ベル「いいの！？でもホワイトさうや...」

ホ「ハイヒー、ヘルさんとの勝負が一まわなしにはすかなしやー。」

ベル「よーしーそれじゃあここへよー。」

ホワイト「ああ…新バージョンポケモン最初の対戦相手が…
ベルで、とても、嬉しいです…」

ベル「ん」、ボールが抜けない！… つとつとつと

赤ワイト「何!?」の仕草!!

この仕草何！？僕を萌え殺す気だな！！！」

チヨレン「うるわいなあ、早くポケモン出せよ」

ホワイト「外野は黙つてろ！！」

…よし、ゆけ、ミジュマル！」

ベル「ん~つと、ポカブ、たいあたり~つ！」

ホワイト「僕も全力でベルちゃんに体当たりしまーす！…！」

チエレン「お~…やめろ~て！」

トレーナー攻撃するとか反則だろ！…！」

ホワイト「攻撃じゃないよ！僕はただ愛の抱擁を…」

チエレン「気持ち悪いわ！…さつさと前も命令しつ…！」

ホワイト「はいはい、一応ポケモンバトルだし。全力で向かわないと失礼だよね！」

おっと、攻撃を受けた。

…最初のバトルだし、やっぱたいあたりだけか。
とまあえずたいあたり連発すれば何とか…」

ホワイト「何だと…？」

ベル「あとちょっとだー！」

ホワイト「な、何だ…？」

まさかこの戦いって完全なる運ゲーか…？
いや、何かキズぐすりとか…な、ない…」

ベル「ポカブー！たいたたり～！」

ホワイト「うわあああああああ

ベル「ふええ…

何だか分からず、ポケモンに技を出してからひつてたら、
何か勝てちゃったあ…」

ホワイト「初バトルで負けるとか…最悪のスタート…」

ベル「う、うめんね。私なんかが勝っちゃって」

ホワイト「いえいえいえいえ…ベルさんに負けたなら本望で
す…！」

チエレン「調子の良い奴…

それより、ベル。周りを見てみたら？」

ベル「へ？あ…あーっ…部屋の中が…ぐちやぐちやに…」

チエレン「はあ。全く、少しばかりも見ないと駄目だよ？」

ベル「うん…」めん…」シヨン

ホワイト「いやホレン...初めてのバトルなんだから別にいいだろ
！」

ホーレン「ここお前の家だぞ...？」

ホワイト「いいのいいの...ベルさんに壊されたならむしろ残してお
きたい...」

ホーレン「マジで何なんだこつ...」

ベル「ホーレンは...どうするの?」

ホーレン「決まりました。バトルするよ」

ホワイト「えー」

ホーレン「何そのあからさまに嫌そな顔...
大丈夫だよ。ベルと違つて僕はちゃんとするから、家は壊さない。
それに、僕だけがバトルしないなんて不公平だからね」

ホワイト「ホーレン。言つとくが、家壊したら弁償してやるつね」

ホーレン「何で僕だけ...」

ホワイト「ホーレン。わけ一ノタージュマル！」

ホーレン「わけ一ノタージュヤー！」

ホワイト「もひ、うなつたらたいあたりの連発だー...」

チヨレン「シタージャー、いらみつかるー。」

ホワイト「そんな小細工通用するかーー。」

ホワイト「勝ちじゃこました」

チヨレン「ぐつ、なんでベルに負けて僕に勝つ……？」

ホワイト「べ、ベルさんは手加減してたんだよ。
本氣出せりんなものぞ！」

チヨレン「うう…

ま、いいか。これから強くなれば。

それじゃ、またね…」

ベル「ポケモンを取りに行くのねー。」

チヨレン「バカ、ホワイトのお世話を謝るのが先だわ」

ベル「はわわーーー、やつだつたーー」

チヨレン「全く……家を壊したのは君だろ？ その君が謝りないでどうつかる」

ベル「うう……めと……」シヨン

ホワイト「いらチレンーお前さつきベルさんの事バカって言つたな!?」

そんな事言つと口クなトレーナーになれないぞ!!
ベル、別にこんな奴の言つ事気にしなくてもいいからね!」

チョレン「…なんで僕が怒られるの?」

ベル「あの…」「めんなさい!」

ホワイト母「いえいえ、大丈夫よ。
初めての勝負だつたんでしょ?
いいわよいわよ。私が片付けておくから。」

チョレン「優しいお母さんで良かつた」

ベル「それにしても…あんなに小さいポケモンも、
いざとなると凄い力を發揮するんだね〜!」

ホワイト「僕のポケットモンスターもいざとなつたら凄い力を發揮
するよ!」

チョレン「やめろ」

ホワイト母「子供は皆、ポケモンを持って、
旅して大人になるのよ」

ベル「…旅、かあ」

チヨレン「…それじゃ、僕はアララギ博士の家に行へかう」

ベル「あ、私一度家に戻るね！」

チヨレン「じゃ、博士の家で待つてるよー。」

ホワイト「…ベルさんは家に帰るのか。
それじゃあ家に行くしかない！」

ベルの家

ベル父「駄目駄目駄目駄目駄目！」

駄目駄目駄目駄目！駄目たら駄目！無駄！」

ベル「えーっ！でも、私だつて出来るもん！」

ベル母「まあまあ。ベルもそういう年になつたんですよ。

良い事じゃないですか。あのベルが一人で冒険に出るなんて

ベル父「むう…とにかく駄目だからな…」

ベル「そんなあ…もう、いい！」ダツ

ベル父「待ちなさい！ベル！」

ベル「…!? ホワイト…？」

ホワイト「あ」

ベル「…い、今のは、チヨレンとか博士には秘密だよ？」

ホワイト「やささん」

続く

episode 1 - 2 チョーミーが。まるでホワイトみたいな名前だな

アララギ博士研究所 1番道路 アララギ博士の捕獲の見本

アララギ博士研究所

アララギ「こんにちはー。自己紹介を…」

チョレン「知っていますよ。アララギ博士」

アララギ「もう、いいじゃない。

それより、あなた達。

早くもバトルをしたのね！

ポケモンも、何だかあなた達に懷いてる感じがするわ！」

チョレン「そうですか？」

ベル「ポカブ、私に懐いてくれてるかなあ」

ホワイト「僕はベルさんになつき度MAXです！」

チョレン「お前はちょっと黙れよ」

ホワイト「もう夜に戦わせたら進化しそうな勢いです！」

チョレン「頼むから黙ってくれ」

ホワイト「それは冗談として、確かにこの『ジコマル』が懷いてるような気も…」

アララギ「きっとあなた達は、トレーナーの才能があるわね！とこつわけで、今日はあなた達にこれを上げるわ！」

チヨレン「こ、これはもしゃ…」

アララギ「そう！ポケモン図鑑よ！これからあなた達には、私の研究の為に、世界を旅して色んなポケモンと出会って欲しいの！」

ホワイト「博士も運動した方がダイエットになるんじゃないですか

アララギ「うつさらわね！

フィールドワークが趣味のオダマキも太ってるじゃなー！」

ホワイト「確かに

アララギ「とこつわけで、これからあなた達には、旅をしてもらうわよ！

もちろん、チャンピオンになるも良し。名づけて『イッシュ地方ぶらり珍道中』の開幕！」

ホワイト「そんな名前の旅嫌だ…」

アララギ「それじゃ、一番道路に来てちょうどいい。ポケモンの捕まえ方教えてあげるから」

三人「　「　「はーー」」

ベル「…いいんだよね？私…」

博士に頼まれたんだから、冒険してもいいんだよね…？」

チエレン「ああ。図鑑を完成させながら、好きなように旅すればいい」

ベル「…嬉しい！」

ホワイト「僕も嬉しいです」

チエレン「さっきから思つてたんだけどさ、
ホワイト、何か口調が改まってない？
なんで今更僕らに改まる必要があるの？」

ホワイト「この方が主人公としてやりやすいんですね！
と、僕の遠い遠い親戚のオージュさんも言つてました」

チエレン「そ、 そなんだ。

なら、好きなように呼んでもらってかまわないけど」

ホワイト「かまわないの？なら、チエリンボで決定」

チエレン「それはやめろ」

ベル「チエレンに新しいあだ名がついたね～！」

チヨレン「ベル、君はこんな名前で呼ばないでくれよ」

ベル「えー？」

ホワイト「チヨレンは、何だか真面目そうだからね。真面目だから、僕ら一人がその真面目さをほぐせたらなと思つたんだけど」

ベル「そななんだ！ ホワイトなりにチヨレンの事考えてたんだね！」

チヨレン「ベル。多分違うぞ…。

こいつはただ僕を馬鹿にしたがってるだけだ

ホワイト「そんなわけないじゃないかー。僕達友達でしょー」

チヨレン「超棒読み…」

ホワイト「嫁ー！」

チヨレン「ストレーントすきだろ」

ホワイト「…とここののは流石にまずいから、ベルさんで良いよ」

ベル「えー？ サン付けなんて要らないのー」

ホワイト「自分なりの敬意ですー！」

ベル「まあ、ホワイトがそつこにたいながまわなにナビ」

研究所外

ベル「あうーー！ホワイト、待つトトト！」

ホワイト「ほー待ちます待ちます」

ホワイト母「あーー、どうだつた？博士の話せ」

ホワイト「母や。実は…」

ホワイト母「あーー、旅する事になつたのーーす」

ホワイト「いや、まだ何も言つてないけど」

ホワイト母「なーんて、私は既に博士からその話は聞いてるわ」

ホワイト「やうだつたんですか」

ホワイト母「じゅ、旅するならタウンマップを持つてこきなわー」

ホワイト「おお、タウンマップだ」

ホワイト母「それじゃーね、頑張ってねー」

ホワイト「随分と軽いな…」

ベル「それじゃ、行こうか…」

ホワイト「ああ、これから一人の冒険が…」

チヨレン「僕はどうしたよ僕は

一番道路前

チヨレン「アララギ博士が待つよ。早く行こうよ

ベル「ねえねえ、最初の一歩は皆で踏み出すなー?」

チヨレン「とこいと

ベル「これが最初の一歩なんだから、皆と一緒に入るよ。」

ホワイト「それは良こ考えだ…」

チヨレン「それじゃ、皆で行こうか…」

ホワイト「ベルさんの隣で共に歩ける日が来るなんて…

チヨレン「それじゃ、行くよ…」

ホワイト「ちょっと待った」

チヨレン「何だよお前は」

ホワイト「チヨレン、あと一マスクくらい離れてくれると嬉しいんだけど」

チヨレン「あのを、君は僕を一体なんだと思つてるわけ?」

ホワイト「やくらんぼポケモン」

チヨレン「だからチヨリンボやめり!...!」

最初の一歩くらー一緒に踏み出していいだろー?」

ホワイト「えー」

ベル「チヨレンも友達じゃない。一緒に踏み出すわいよ」

ホワイト「はこねつしまじょうか」

チヨレン「何この扱いの差」

チヨレン「それじゃあ行こ!」

ベル「せーの!...」

ホワイト「ひよつと待つたあ!...!」

チヨレン「だあああああつ!...早く踏み出されやん!...!」

ホワイト「いや、まあレポート書こておかなこと、って思つて…」

チヨレン「何でこじで書くんだよ…」

「んなの踏み出した後にこいつでも書けるだろ…」

ホワイト「チヨレン。ポケモン世界では、
レポートはトライレ並みに重要な事なんだぞ」

チヨレン「何その謎の文化」

ホワイト「しかもトライレと違つてビリードも書ける…」

ベル「そつかー。ポケモン世界にトライレがないのはヤバい事かー。」

チヨレン「何故今ので納得する…?」

ホワイト「つまりだ。現実世界の人とレポートとのつなぎを通じて
繋がつているのがこの世界であつてセレクタントライ」

チヨレン「詳しく述べんでいい…」

ベル「ねーねー、早く踏み出やつよ。」

チヨレン「一番道路の前でこんなに踏み出せないトレーナーって僕
らへりいだぞ…」

ホワイト「それもそうですね。レポート書き終わつました」

チヨレン「はあ。なら、今度これから行へよ。」

ベル「待つたーっ！」

チヨレン「いい加減にしろおおおおお…！」

今度はベルかよ！一体何があつたんだよー？」

ベル「ごつめーん、ちょっとクッズレ起しちゃつて

チヨレン「早く直せよ…」

ベル「だつて、クッズレたまま一番道路に入つてけりやうなんて
かつこ悪いよ

チヨレン「そりゃそうだけども…」

ベル「ありがと、もう直つた

チヨレン「…なら、今度こそ本当にいくぞ。」

ベル「せーのつ…！」

1番道路

ベル「はあ…なんだかドキドキワクわくしちゃうねー！」

チヨレン「そうだな。じいから旅が…」

ホワイトアトモ達は 今、イッシュ地方への 第一步を 踏み出した

！」

チヨレン「どうやらおつせんみたいな台詞だな」

ベル「とにかく早く行こうよーーー！」

ホワイト「うん」

ベル「きやあつ」ドテツ

チヨレン「大丈夫か！？ 結局、靴ズレ直してもこけるんじゃない
か」

ベル「えへへ…『めん』『めん』

ホワイト「見えた…」

チヨレン「？ とつあえず早く行こうよーーー！」

アララギ「遅いわよー。何やったのよ」

ホワイト「いやー、ちよつとヘルポートを…」

ベル「あたしはクツズレを…」

アララギ「？？？」

チヨレン「分からないでしょ、うね」

アララギ「とにかく、今からポケモンの捕まえ方を教えるわよー。」

ベル「はーいー。」

アララギ「じつは草むらに入ると…」

ナレーション『あー、やせこの //ネズミ// が とびだしてきたー。』

ホワイト「あーなんかネズミが出た」

チヨレン「//ネズミ… だな」

ベル「どうやって捕まえるのかなあー」

ホワイト「チラチラ」

ベル「…なんか、視線が」

ホワイト「ん? ベルさんをチラ見してただけ」

ベル「何それ…」

アララギ「ぬけー、チラー //ヤー。」

チヨレン「チラー //イカ。まるでホワイトみたいな名前だな」

ホワイト「どうこう意味だよ」

アララギ「チラー://イのはたぐで、相手のHPを削るのね」

ベル「うんうん…」

チヨレン「ベルは本当に初めてみたいだな」

アララギ「そこで、モンスターボール…あら?」

ホワイト「どったの?」

ナレ『ボックスにいれているポケモンがいっぱいなのでつかえません…』

ホワイト「どこのGB版だよ」

アララギ「冗談よ。それではモンスターボールを投げて!」

ナレ『やつたーミネズミをつかまえたぞ』

ホワイト「ナーチャンやる返せよ」

アララギ「…と、いう感じね」

ベル「へへー、そなんだ!」

アララギ「それじゃ、皆、

私はこの先のカラクサタウンで待つてまーすー」

ベル「はーい…そつだ!せつかくだから、勝負しようよー。」

ホワイト「ま…また?」

ベル「ポケモンを捕まえた数で勝負するんだよー。」

ホワイト「なるほどね」

チエレン「そうだな。その方が楽しそうだ。

それじゃ、カラクサに着くまで、ポケモンの回復は自由とこいつ事で

ベル「私とポカブのコンビが一番に決まってるもんー。」

続く

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3652o/>

イッシュ地方ぶらり珍道中

2010年10月17日20時43分発行